



□巻頭言

熊本学園大学外国語学部教授
外国語学部長 赤井 恵子

山本七平が雑誌連載していた書評の中に『日本人の自伝 1 福沢諭吉・渋沢栄一・前島密』

(平凡社)について述べたものがある。幕末から明治への一大変革期を生き抜いて来た三人の共通点を「強い実証的精神をもち、自分に納得できぬ理屈に合わぬことは納得できるまで究明した点」に見出している。例えば福沢と渋沢の二人は怪しげな祈祷師を、前者はからかって

□■□学科の最新ニュース！□■□

新型コロナの感染状況も落ち着き、専門的な科目の大部分が対面授業に戻りました。今年度は2年ぶりに対面式のオープンキャンパスが開催されます。感染対策から定員を絞った事前予約制ですが、コロナ後を見ずえた学科の学びについて、高校生のみなさんとたくさんお話できるのを楽しみにしています。

辟易させ、後者は理詰めでやり込めて退散させた。しかも三人とも14～16歳頃、西歐的なものとは未接触の、少年期の経験である。「明治を形成したものは必ずしも西歐の影響のみとは言い切れない、何か別の基本的な要素」の存在を、山本は『近代の創造—渋沢栄一—の思想と行動』（1987年）において、「東アジア文化圏」の様々な思想からの学びという観点から解明しており、興味深い。

□社会関係資本と韓国の教育福祉の取組み

韓国では1990年代後半以降、子どもの貧困問題をはじめ学校教育の課題が多様化、複雑化していく中、教育福祉事業という名の下で格差は正に向けた様々な取り組みが学校現場に導入されてきた。その中から、私はこれまで「放課後学校」と「教育福祉優先支援事業」という二つの取組みに焦点を当て、比較教育学の観点から、中央政府によって量的に拡大した教育福祉事業が実際に学校現場ではどのように受け止められ、どのような効果を生み出しているのかをフィールドワークを中心に検討してきた。そのプロセスの中で、教育福祉の質的な充実を捉える視点として注目したのが社会関係資本である。

社会関係資本はブルデュー、コールマン、パットナムの3人の理論的原型を出発点とし「個人レベルにおける信頼関係や規範、または組織レベルにおけるネットワーク等からなる関係性に基盤を置く有形・無形の資本」として定義される。日韓において社会関係資本を用いた教育研究は主に教育社会学の分野で行われてきたが、近年は子どもを取り巻く環境が大きく変化している中、個人への教育機会の形式的な平等のみに関心を払うのではなく、学校と家庭、学校と社会との相互作用を踏まえたアプローチが重要であるとの認識から、他の教育学の分野においても社会関係資本への関心が高まってきている。

社会関係資本については様々な捉え方が存在するが、私はネットワークの形成という構造的・可視的な次元と、

東アジア学科特任准教授 金 美連 (新任)

信頼関係など個人の心理的な変化や態度に影響を与える関係的・非可視的な次元に分けて、韓国の教育福祉の特徴を考察してきた。その結果、韓国では教育福祉の取り組みにより、学校を基盤としたネットワークが形成され、民間の人材やノウハウ、社会福祉や地域社会等との連携が進められていること、また、個々の子どもの情緒的・社会的な成長を支える仕組みづくりも行われ、教育福祉の専門家(教育福祉士)の配置や新たな「場」の設置(教育福祉室)、教師によるメンタリング・プログラムが導入されたことが確認された。

一方で、公教育に福祉の視点や要素をどのように取込むかは決して容易なことではなく、依然として教師の形式的な参加や、教師と教育福祉の専門家との連携も課題となっている。教師の多忙化が指摘される中、子ども一人ひとりに対する個別的なケアを可能にするために、教師にはどのような制度的支援が必要なのか、また子どもの社会関係資本の醸成をいかに効果的に達成していくのか、韓国の事例を通じて、引き続き検討していく必要がある。

□「出張日記」に代えて

書店が好きだ。こだわりの独立系書店もいいが、大型書店が特に。静謐とした空間にまだ読んだことのない本たちがびっしりと並んでいる。その空間に身を置くと、なんともいえない高揚感と平穏を感じることができる。韓国に行ったときは、必ず教保文庫（キョボムンゴ）をはじめとした大型書店を訪れる。まずは専門の韓国語学の本をチェックし、その後に語学書や小説を眺める。一通り見終わったあとは、普段ならあまり関心を持っていないようなジャンルの売り場も練り歩き、本屋観光を楽しむ。そうこうしていると、ゆうに3時間ほど経ってい

東アジア学科講師 黒島 規史

るということも珍しくない。一度韓国に住む日本人の友達と書店を訪れたときも同じことをしてしまったために心底呆れられてしまった。そのことがあってからは必ず一人で行くようにしている。専門の本をたんまりと買い込み、段ボールいっぱい詰めて日本の自宅に送るまでがお決まりのパターンである。最近に必要な本は韓国から簡単に取り寄せることができるので研究に支障はないのだが、それでもはやく韓国に行って、書店の雰囲気を感じたり、思いがけない1冊との出会いに心躍らせたりしたいものである。

□東アジアのあれこれー中国の大学受験の変化について

中国の大学共通試験は6月に全土で実施され、高校生のはほとんどが受験する。1977年の開始時には合格率5%に満たなかったが、1998年に30%、2010年に80%に達し、大学新設と私立大学制度の創設によって2017年には受験者数940万人、合格率80%でほぼ安定した。現在その7割が国公立大学である。さらに2000年の世紀変わり、漢族の象徴である辰年が重なったベビーブーム世代が受験年齢となると、2018年に975万人、2019年に1036万人と受験者数は増加した。

こうしたなかで2020年に入り、コロナ問題が発生した。中国は「留学大国」で毎年大量の学生が主に欧米諸国へと留学する。留学者数は2018年に66万人、2019

東アジア学科教授 李 珊

年に70万人にのぼったが、今回高校卒業生20%を含めて海外留学が制限されたため、共通試験の受験者数は40万人急増し、受験日も7月へと延期された。

一方、中国では海外留学者の帰国が毎年増え続け、大卒の就職難が社会現象化している。また技術者不足も深刻化し、政府はその緩和策として三年制の技術専門学校を拡充に、ここ10年間力を入れている。2019年には全日制を主とし、一部社会人、失業者などの通信制および二部制も含めて年間100万人を受け入れる「百万名高職拡招計画」を掲げ、2019～20年度に一応目標を達成したと発表している。ちなみに今年6月の共通受験者数は微増の1078万人であった。

□新書紹介

丸橋充拓『江南の発展ー南宋まで』（岩波新書、2020年）

本書は、黄河流域の中原を軸とした王朝交代史ではなく、長江流域の江南に焦点を当てることで、大陸国家とは異なる中国の特徴を鮮やかに提示した好著である。特に古代国家の中心地である「馬の世界」の中原が、次第に「船の世界」である江南に経済面・文化面で依存を深めていく歴史的变化を丁寧に描いている点は注目される。具体的には、湿潤な気候の江南では水田農業が営まれていたが、五胡十六国の混乱期に中原から大規模な人口移動が起こると、開発が本格化する。その後隋唐から宋代にかけて農地の開発が一層拡大するとともに、漕運によって経済的発展が進み、ついに南北の人口比率も逆転することになるのである。合わせて、江南の中華王朝は、東南アジア諸国との活発な交流を展開する海洋国家の一面も有しており、その範囲は遠くインド洋にまで及んでいた。学生の頃から中国史でしばしば登場する南北の分裂に興味をもっていたが、世界史の教科書を読んで同じ疑問をもった高校生にぜひ読んでもらいたい1冊である。

（東アジア学科准教授 土井 浩嗣）



■編集後記■

本学では、来年春からの韓国・中国語圏への交換留学に向けて、選考試験がはじまりました。海外渡航の本格的再開を展望して、学生も前向きに動きはじめています。また、今年から本学でオンライン留学サロンがはじまり、東アジア学科の学生も韓国などの学生との交流を楽しんでいます。コロナ禍の中で、これまでとは違ったライトな国際交流が生まれています。（ど）

発行者 熊本学園大学外国語学部東アジア学科
編集人 土井 浩嗣（東アジア学科長）
〒860 - 8680 熊本市中央区大江 2-5-1
Tel 096-364-5161（代表）